

「我が敬愛するパリよ。貴女が直面した犯罪を悲しく思います。でも、このような出来事は、私達のアラブ諸国では日々、起こっているのです。全世界が貴女の味方になってくれるのを、ただただ、私は羨ましく思います」

イスラム世界に関する常に冷静、的確、深遠な指摘で知られる宮田律氏(わきむ)がフェイスブックで紹介した、シリア出身で現在はUAEアラブ首長国連邦在住の女性アナウンサー、シャ

ハド・バツラードさんがツイッターに投稿した眩(くら)きです。現

代イスラム研究センター元理事長の彼は続けます。

「シリア人権監視団に拠(よ)れば、2015年は10月までに欧米、ロシア等の空爆を含めて内戦で1万883人のシリア市民が犠牲になった。パリの犠牲者の凡(およ)そ100倍」

「フランスは、シリアを委任統治した国で、1920年から占領統治が始まった。その支配の手法は分断統治。現在のバッシュヤール・アル・アサド大統領の出身宗派で

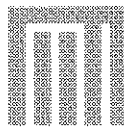
連載
第7回

ささやかだけど、 たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

サイドの至言、ド・ビルパンの諫言 パリ同時テロというプロパガンダ



あるアラウィー派を優遇し、多数派のスニ派と敵対させ、或いはクリスチャンが多いレバノンをシリアから切り離す事も行った」
奇しくも、13日の金曜日^①にパリ各所で勃発したテロリズムを受けて、宮田氏も僕も利用する^②フェイスブックは、「パリ市民の安全と平和を願うプロファイル写真を設定しよう」とフランス国旗を各人のアイコンに重ね合わせる設定変更を促しました。

同じく僕が利用するアマゾンには、「自由・平等・博愛を意味する」三色旗と
solidarite^③連帯の文字を、運用する全14カ国のサイトのトップに掲げました。

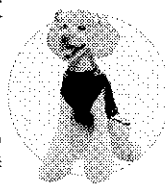
「テロとは他者が米国に対して行う行為であって、我々米国がどんなに残酷な事を他者に行っても、それはテロではなく、防衛やテロ防止と呼ばれる」

半世紀に亘(わた)ってマサチューセッツ工科大学で教鞭(きょうべん)を執ったユダヤ系DNAの言語哲学者ノーム・チョムスキーが発した「9・11」

直後の警句を僕は反芻し、イギリス同様に植民地主義的野心でフランスが人工的に建国したシリアやイラクに跨がる地域で「グレムリン」の如く増殖したISILが標的とした犠牲者は今回も、市井に暮らす無辜の民だった不条理を痛感し、宮田氏がISILの最後に記した一文「空爆、或いは戦争によって多くの同胞を失った日本人には、パリの犠牲者に対する弔意を示すと共に、シリア人やイラク人の苦しみや悲しみも理解出来ると思うのだが」を心の中で復誦しました。

停戦、終戦が何時の日か訪れる国家VS国家の戦争と異なり、宣戦布告なきテロは、終わりなき日常。誤解を恐れず申し上げれば、軍事という抗生物質で取り取えず一旦は「駆逐」可能な前者がバクテリアだとしたら、後者は変容し続けるウイルス。一方的に「国家」を名乗るISIL=Islamic State in Iraq and the Levantが、得体の知れぬ変幻自在な代物です。空爆によって終結出来るのか。出来ないからテロの連鎖が続いているのでは。対ISIL「有志国連合」だけが普遍的な価値を共有する文明国なのだろうか。製造物責任法に適用されたなら如何に。根源的問い掛けが生まれる所以です。が、共に10%台の失業率と支持率を一向に改善できず、低迷・迷走していた社会党員のフランソワ・オランド大統領は、パリ近郊のヴェルサイユ宮殿に上下両院の全議員を招く異例の会議を緊急開催。「我々の敵はISILだ」「空爆を強化し、殲滅する」「フランスを脅かす過激思想のテロリストと、我々は戦争状態」と激昂し、フランス国歌ラ・マルセイエーズを全員で熱唱。改めて僕も一読しました。「奴らは我らの元に来て 我らの子と妻の喉を掻き切る 武器を取れ 市民らよ 隊列を組め 前進せよ 汚れた血が我らの畑の敵を満たすまで」。大政翼賛会、大日本婦人会、大日本言論報国会も顔負けの歌詞に驚嘆します。

西洋植民地主義の辛酸を舐めたパレスチナ人としてエルサレムに生まれ、レバノンで育ったエドワード・サイードはニューヨークのコーンピア大学で教鞭を執る傍ら1978年に、「オリエンタリズム」こそは欧米の帝国主義的な野心を隠匿する惹句に過ぎぬと看破します。その彼の至言が「Jewish Non-Jew, Non-Jewish Jew」です。マルクスもフロイトもアインシュタインも、定住するべき場所を持ち得ぬユダヤ人たればこそ「肉体はジュイイツシユなれど、精神はノン・ジュユ」。世界市民として自らの頭脳を人類の幸福の為に提供する気概の持ち主でした。が、昨今はユダヤ人のみならず欧米人も日本人も、私は国籍を超えたノン・ジュイイツシユですと語りながらその実、利己的な私欲を追求してはいまいか。「肉体は世界市民と嘯きながら、精神は欲望の塊に墮してはいまいか」。2003年に白血病で身罷ったサイードの至言です。思えば壮大なるEJの取り組みは、旅券を提示せずとも誰もが国境を跨げる「自由」ボーダレスと、各地域の料理や言語、習慣や宗教を尊重する「民主」ボーダーフルボーダーコンシヤス」の止揚「アウフヘーベン」でした。即ち、父親のピエール・トルドーの衣鉢を継いでカナダのジャスティン・トルドー新首相が打ち出した自治的多文化主義。が、オランド氏の「我々がフランスと共にある」と唱和する他の多くの指導者も、実はEJの主張と同じエスノセントリズム「自民族中心主義の隘路へと陥っているのです。僕は、詩人でもあるドミニク・ド・ビルパン氏がイラク戦争に反対し、2003年のヴァレンタインデーに国連安保理で、「戦争と占領、それに伴う残虐行為を体験した欧州の古い国だからこそフランスは謙言する」と演説。万雷の拍手に包まれたのを想起します。ジャック・シラク大統領の下で首相を務めた彼が、ニコラ・サルコジ政権下で「冤罪」に巻き込まれなかつたなら果たして、フランス大統領として如何なる演説をしたであろうか、とも。



田中康夫「ささやかだけど、たしかなこと。」は毎月最終週に連載します。

生まれ、レバノンで育ったエドワード・サイードはニューヨークのコーンピア大学で教鞭を執る傍ら1978年に、「オリエンタリズム」こそは欧米の帝国主義的な野心を隠匿する惹句に過ぎぬと看破します。その彼の至言が「Jewish Non-Jew, Non-Jewish Jew」です。マルクスもフロイトもアインシュタインも、定住するべき場所を持ち得ぬユダヤ人たればこそ「肉体はジュイイツシユなれど、精神はノン・ジュユ」。世界市民として自らの頭脳を人類の幸福の為に提供する気概の持ち主でした。が、昨今はユダヤ人のみならず欧米人も日本人も、私は国籍を超えたノン・ジュイイツシユですと語りながらその実、利己的な私欲を追求してはいまいか。「肉体は世界市民と嘯きながら、精神は欲望の塊に墮してはいまいか」。2003年に白血病で身罷ったサイードの至言です。思えば壮大なるEJの取り組みは、旅券を提示せずとも誰もが国境を跨げる「自由」ボーダレスと、各地域の料理や言語、習慣や宗教を尊重する「民主」ボーダーフルボーダーコンシヤス」の止揚「アウフヘーベン」でした。即ち、父親のピエール・トルドーの衣鉢を継いでカナダのジャスティン・トルドー新首相が打ち出した自治的多文化主義。が、オランド氏の「我々がフランスと共にある」と唱和する他の多くの指導者も、実はEJの主張と同じエスノセントリズム「自民族中心主義の隘路へと陥っているのです。僕は、詩人でもあるドミニク・ド・ビルパン氏がイラク戦争に反対し、2003年のヴァレンタインデーに国連安保理で、「戦争と占領、それに伴う残虐行為を体験した欧州の古い国だからこそフランスは謙言する」と演説。万雷の拍手に包まれたのを想起します。ジャック・シラク大統領の下で首相を務めた彼が、ニコラ・サルコジ政権下で「冤罪」に巻き込まれなかつたなら果たして、フランス大統領として如何なる演説をしたであろうか、とも。